

【漢検漢字文化研究奨励賞】優秀賞

ベトナム加点資料の句読点から見た訓読の可能性

富山大学大学院人文科学研究科修士課程 2 年

Nguyễn Thị Thu Huyền (グエン・ティー・トゥー・フエン)

1. 問題の所在

漢字文化圏諸言語による漢文文献の読解については、日本語、朝鮮語では漢文本文に直接
自言語を表わす要素を加点した資料が残っていて、読解の具体的様相が詳しく解明できる。中
国語は自言語の古典籍を自言語で読解した敦煌加点本が残っており、科段、句読点、破音、字
音注記などの簡単な書き込みからでも読解の具体的様相は詳しく解明できる。これに対してベ
トナム語の場合は、漢文本文に直接加点されるのは、科段、句読点、破音、朱引といった符号だ
けであって、ベトナム語を直接表わしているわけではない。また字喃が漢文本文の中に割注とし
て夾み込まれることはあるが、字喃が漢文本文に直接加点されることはなく¹、漢文本文が具
体的にどのように読まれたのか（漢越音だけで音読されたのか、それともベトナム語で訓読され
たのか）、近年の先行研究による議論はいくつかあるもの²、依然として十分に解明されてい
るとは言い難い。

本稿は、これまでベトナム加点資料において句読点と見なされていた加点の中に、ある環境
のもとでは特殊な形態の加点があることを手がかりに³、少なくとも漢文本文のある部分はベ
トナム語によって読まれていた（＝訓読されていた）ことを推定しようとするものである。分析対
象とする資料は、喃遺産保存財団（Vietnamese Nom Preservation Foundation、VNPF）のデジタ
ルアーカイブで公開されているベトナム国家図書館（National Library of Vietnam、NLV）所蔵
の漢喃資料 1249 点（経部 68 点、史部 371 点、子部 400 点、集部 410 点）の内、経部加点資料 53
点である。これらは一部近代写本を含むが、ほとんどが 19 世紀阮朝時代の刊記を持つ版本で
ある⁴。なおこれらに加え、一部未公開の漢喃研究所蔵資料も取り上げる⁵。

2. ベトナム加点資料に見える特殊な句読点について

ベトナムの漢文文献に科段、句読点、破音、朱引（固有名詞表示、読書符）の加点があること
については、すでに論じられている⁶。このうち、句読点は敦煌加点本と同様に漢文本文の右下
に置かれることが一般的で、日本の訓点資料の句点（右下）と読点（文字間中央）のように
区別しない⁷。この場合の加点形態はゴマ点が通常であるが（以下、通常の句読点）、一部の
加点資料では文末と段落末尾に二重ゴマ点が加点される例もある（図 1 参照）。その上で改
めて句読点を観察してみると、これらの通常の句読点とは異なり、漢文本文の左下にレ点、ゴマ
点、文字間中央に小さいゴマ点、右下に小さいゴマ点等、通常の句読点の形態および加点位置
の異なる加点が確認できる（図 2 参照）。これらの加点に共通するのは、小助川貞次(2019)が
指摘するように「主題の提示」と「主題についての説明」が続く漢文構文の境目に多く現れること
で、通常の句読点の機能とは異なった特別な機能を持っているのではないかと考えられる。通
常の右下ゴマ点には、このような構文に加点される例を確認できないし、また少なくとも左下の

レ点、中央や右下の小さいゴマ点が通常の句読点の機能を示している例も確認できないからである（文末に加点されるレ点については4節で述べる）。



図1：通常の句読点モデル
右下ゴマ点、二重ゴマ点

図2：特殊な句読点モデル
左レ点、左ゴマ点、中央小ゴマ点、右下小ゴマ点

日本語の訓読では、このような漢文構文がある場合、助詞の「は」を添えて「AはBなり」のように読むことが一般的である。一方、ベトナム語ではこのような「主題の提示」と「主題についての説明」が続く構文では、後述するようにその境目に繫辞の「là」が使われることが多い。加点形態や加点位置の違いは、通常の句読点の機能と識別するために選択されたのではないかと考えられる。

このような観点から、ベトナム国家図書館所蔵の経部加点本 53 点について、通常の句読点以外の特殊な句読点について全例調査を行った。結果を次頁表 1 に示す。特殊な句読点が見られるのは経部加点本 53 資料の内 29 資料である（これらの資料には通常の句読点も加点されるが、文末を除いて特殊な句読点は同時に加点されない）。加点形態と加点位置を詳細に見ると、文中左下のレ点（以下、レ点）、文末左下のレ点（以下、文末レ点）、文中左下のゴマ点（以下、左ゴマ点）、文中右下の通常より小さいゴマ点（以下、右ゴマ点）、文中中央の小さいゴマ点（以下、中央ゴマ点）がある。ゴマ点の加点は文中にしか見られないが、レ点は文中だけではなく文末にも加点される。これらの特殊な句読点は、すべての加点資料に均一に現れるわけではなく、全体に数多く見られる資料（R.1310 詩経大全巻 5 では左ゴマ点 1243 箇所）も、また散発的にしか見られない資料（R.380 大学節要ではレ点 2 箇所）もある。さらに、一つの資料に一種類の句読点のみが使われるとは限らず、2～3 種類の句読点が同時に使われることもある。例えば、R.410 周礼節要巻 5-6 と R.654 周礼節要巻 2 では左ゴマ点と右ゴマ点、R.1277 書経大全巻 1-2、R.1306 詩経大全巻 1-3、R.1320 詩経大全巻 12-13 では右ゴマ点と中央ゴマ点が見られる。また、レ点についてはレ点以外の加点が見えない資料（R.178 論語節要巻 2、R.179 論語節要巻 1、R.180 孟子節要巻 1-2）もあるが、左ゴマ点とともにレ点の加点が使われる資料（R.654 周礼節要巻 2、R.1277 書経大全巻 1-2、R.1306 詩経大全巻 1-3、R.1320 詩経大全巻 12-13）もある。

なお NLV の ID は一冊毎に振られているが、以下のように元来僚巻である資料（ID が連続する）では同じ形態の句読点が使われ、それぞれ同一の読者が加点した可能性が窺える。

- ・ R.178・R.179 論語節要、R.180 孟子節要巻、R.380 大学節要の四書節要はレ点
- ・ R.344、R.346、R.410、R.654 の周禮節要は左ゴマ点
- ・ R.1023、R.1024、R.1025、R.1225、R.1226 の論語集注大全は左ゴマ点
- ・ R.1044、R.1045 の子思中庸大全章句は左ゴマ点
- ・ R.1309、R.1310、R.1314、R.1316、R.1318 の詩経大全は左ゴマ点

ただし、詩経大全では R.1306（巻 1-3）と R.1320（巻 12-13）が右ゴマ点と中央ゴマ点を使用するのに対して、R.1309（巻 4）、R.1310（巻 5）、R.1314（巻 6-7）、R.1316（巻 8-9）、R.1318（巻 10-11）では左ゴマ点を使用するなど、元来僚巻であっても巻による違いも見られる。

表 1：ベトナム国家図書館所蔵（VNPF 公開）の経部加点資料に見られる特殊な句読点

R.xxx はベトナム国家図書館のオリジナル ID

	資料名	文中左下 レ点	文中左下 ゴマ点	文中右下 ゴマ点	文中中央 ゴマ点	文末左下 レ点
1	R.178 論語節要巻 2	305				16
2	R.179 論語節要巻 1	391				34
3	R.180 孟子節要巻 1-2	559				20
4	R.344 周禮節要巻 1		44			
5	R.346 周禮節要巻 3-4		10			
6	R.368 大學中庸集解					3
7	R.380 大學節要	2				
8	R.410 周禮節要巻 5-6		1	7		
9	R.654 周禮節要巻 2		44	7		1
10	R.1023 論語集註大全巻 1-2		162			53
11	R.1024 論語集註大全巻 3-5		217			80
12	R.1025 論語集註大全巻 6-7		90			
13	R.1044 子思中庸大全章句上		5			
14	R.1045 子思中庸大全章句下		2			
15	R.1225 論語集註大全巻 13-14		23			
16	R.1226 論語集註大全巻 15-17		16			
17	R.1277 書經大全巻 1-2			534	4	215
18	R.1287 五經節要書經序・巻 1					59
19	R.1288 五經節要書經巻 2					40
20	R.1289 五經節要書經巻 3					60
21	R.1290 五經節要書經巻 4					46
22	R.1306 詩經大全巻 1-3			737	3	94
23	R.1309 詩經大全巻 4		636			
24	R.1310 詩經大全巻 5		1243			
25	R.1314 詩經大全巻 6-7		99			
26	R.1316 詩經大全巻 8-9		35			
27	R.1318 詩經大全巻 10-11		35			
28	R.1320 詩經大全巻 12-13			72	801	62
29	R.1332 禮記大全巻 1		14			
	合計	1257	2676	1357	808	783

3. ゴマ点による特殊な句読点

ゴマ点による特殊な句読点は、加点本 29 資料の内 20 資料に見られ、上に述べた 3 種類の加点位置（左下・中央・右下）が確認できる（R.xxx：NLV の ID、数字：丁数、ab：表裏、以下同じ）。

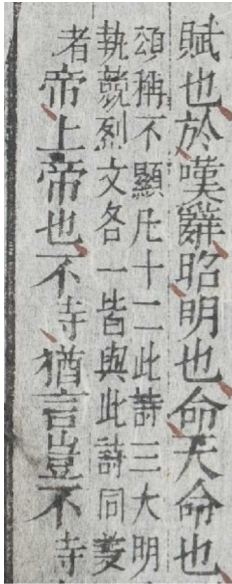


図 3：左ゴマ点

R.1310_1b 詩經大全卷 5



図 4：中央ゴマ点

R.1320_1a 詩經大全卷 12

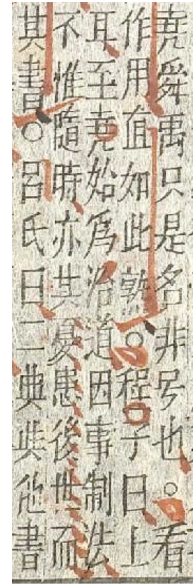


図 5：右ゴマ点

R.1306_5b 詩經大全卷 1

図 3 に示した R.1310 詩經大全卷 5（文王之什・文王）の「於*嘆辭」「昭*明也」「命*天命也」「帝*上帝也」「不時*猶言豈不時」⁸ は、經文「文王在上.於 昭于天.周雖舊邦.其命維新.有周不顯.帝命不時.文王陟降.在帝左右.」（特殊な句読点は「*」、普通の句読点は「.」で示す、以下同じ）に対する訓詁的注釈部分で、注解される經文対象語の左下にゴマ点が加点されている。図 4 に示した R.1320 詩經大全卷 12（生民之什・生民）の「民*人也」「時*是也」「祀*祀郊禘也」も經文「厥初生民.時維姜嫄.生民如何.克禋克祀.以弗無子.」に対する訓詁的注釈部分で、注解される經文対象語の中央下に小さいゴマ点が加点されている。図 5 に示した R.1306 詩經大全卷 1（国風・閟雎）の「采*取而擇之也」「芼*熟而薦之也」「琴*五弦或七弦」「瑟*二十五弦」も、經文「參差荇菜.左右采之.窈窕淑女.琴瑟友之.參差荇菜.左右芼之.窈窕淑女.鍾鼓樂之.」に対する訓詁的注釈部分で、注解される經文対象語の右下に小さいゴマ点が加点されている。いずれの場合も特殊なゴマ点の位置に通常のゴマ点は加点されない。

これらのゴマ点は、機能としてはまったく同じで、訓詁的注釈部分（小助川貞次(2019)によれば「主題の提示」と「主題についての説明」が続く漢文構文）の中で、注解される經文対象語の直後に加点されているが、加点位置と加点形態にはそれぞれ違いがある。この違いは以下のように考えることができる。すなわち、文字間中央は左右よりも加点スペースが狭く、またベトナム

加点資料では文字間中央には人名を表わすゴマ点が加点されることがあること、右下は通常の句読点が加点される位置であること、したがってこれらの位置で訓詁的注釈であることを明示するには、通常のゴマ点と形態（この場合は大きさ）を変える必要があるからである。これに対して左下は、文字間に比べて加点スペースが広く、さらにこの位置にはほかに加点されるものがなく、通常のゴマ点の大きさであっても識別可能だからである⁹。

前節で述べたように、このような機能を持つ特殊なゴマ点は一資料に一種類とは限らず、複数種の特殊なゴマ点が使われることがある。ただし、全種類のゴマ点が満遍なく使われているわけではない。例えば、R.1277 書経大全巻 1-2、R.1306 詩経大全巻 1-3、R.1320 詩経大全巻 12-13 では右ゴマ点と中央ゴマ点の両方が用いられているが、頻度差があり、R.1277 書経大全巻 1-2 は右ゴマ点 534 箇所に対して中央ゴマ点は 4 箇所、R.1306 詩経大全巻 1-3 は右ゴマ点 737 箇所に対して中央ゴマ点は 3 箇所しかない。また R.1320 詩経大全巻 12-13 は中央ゴマ点 801 箇所に対して右ゴマ点は 72 箇所とやや多いが、やはり加点数に偏りがある。加点数にこのような差が見られるのは、加点位置の「ずれ」と考えることもできるが、異なる加点者が異なるゴマ点を選択した結果であるとも考えることもできる。このことに関してさらに言えば、これらの加点が通常のゴマ点を用いた句読点や朱引と同時に加点されたのかということが問題となる。上に述べたように、これらの特殊なゴマ点と同時に加点される通常のゴマ点がないこと、またそもそも通常のゴマ点とここで取り上げている特殊なゴマ点の機能が異なることを考えるならば、機能分担をしながら同時に加点されたとも考えることもできる。しかし一方で、このような機能の違いには加点段階の違いを反映すると考えるならば、通常の句読点や朱引が先行し、その上で訓詁的注釈構文を明示的に理解するために特殊なゴマ点を改めて加点したとも考えることもできる¹⁰。

4. レ点による特殊な句読点

レ点による特殊な句読点は、加点本 29 資料の内 15 資料に見られ、文中左下だけではなく文末左下にも加点される。文末のレ点は全体では 783 箇所あり、文中の 1257 箇所に比べて決して少なくはない。文末のみにレ点が加点される資料は、R.368 大学中庸集解、R.654 周禮節要巻 2、R.1023 論語集註大全巻 1-2、R.1024 論語集註大全巻 3-5、R.1277 書経大全巻 1-2、R.1287 ~ R.1290 五経節要書経、R.1306 詩経大全巻 1-3、R.1320 詩経大全巻 12-13 の 11 資料である。この文末のレ点は、テキストのどの部分に加点されるかという点で資料間に違いがある。R.1277 書経大全巻 1-2、R.1287 ~ R.1290 五経節要書経、R.1306 詩経大全巻 1-3、R.1320 詩経大全巻 12-13 では、割注内文頭の中抜きゴマ点とセットで加点されることがあり¹¹（図 6 参照）、それ以外の資料では割注には用いられず、漢文本文の文末のみに加点される。いずれの場合も文末のレ点は、通常のゴマ点による右下句点と重複して加点されるところが、前節で取り上げた文中に加点される特殊なゴマ点と異なる点である。なお、R.654 周禮節要巻 2 では文末のレ点とともに二重ゴマ点（意図としては中抜きゴマ点か、二重ゴマ点は文末以外に加点されない）が同時に加点されることがある（図 7 参照）。

これに対して文中にレ点が加点される資料は、R.178 論語節要巻 2、R.179 論語節要巻第 1、R.180 孟子節要巻 1-2、R.380 大学節要の 4 資料であり¹²、この内、R.178 ~ 180 の 3 資料では少数であるが、文末にもレ点が加点されている。文中のレ点は、ゴマ点と同様に訓詁的注釈部分に多く現れるようで、注釈される語（見出語）と注釈部分との境目に加点されるが、こ

の位置には前節に述べた特殊なゴマ点も通常のゴマ点も同時には加点されない。



図 6：文末左下のレ点
R.1277 書經大全 1b
注文中のㄨ～レ

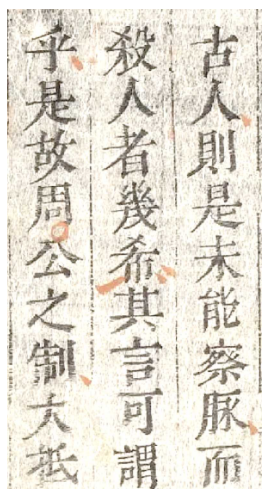


図 7：文末左下のレ点
R.654 周禮節要 26a
二重ゴマ点も加点される

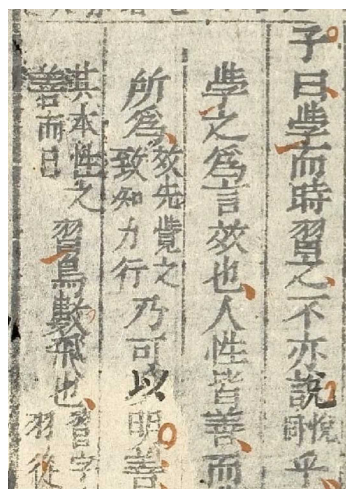


図 8：文中左下のレ点
R.179 論語節要 6b
訓詁的注釈部分での加点

図 8 に示した R.179 論語節要巻 1 (学而篇冒頭) の「學*之爲言效也」「習*鳥數飛也」は、經文「子曰。學而時習之。不亦說乎。」に対する訓詁的注釈部分で、注解される經文対象語の左下にレ点が加点されている。ところが、同じ形態のレ点が經文「子曰學*而時習之」にも加点され、これまで見て来た特殊なゴマ点や訓詁的注釈構文に加点されるレ点とは明らかに異なる。詳しくは 7 節で述べるが、これは「而」を夾んだ接続構文（ここでは順接）であることを明示する加点と考えることができる。

レ点が使われる資料を改めて眺めてみると、大全系では文末に多く、節要系では文中に多く、本文注釈系統によって違いがあるように見える。もしそうだとするならば、大全と節要がそれぞれどのような場で、どのような目的のもとに読まれたのかという背景も考える必要がある。また、大全と節要はその名からも分かるように、注釈の分量は大全の方が圧倒的に多い。大全において細注で記される膨大な注釈内容に対して、通常の句読点だけで文末と句末を識別することは困難である。レ点が大全文末に多く現れ、また通常の句読点と重複して加点されているのは、そのような理由があるのかもしれない。

5. ベトナム語における基本的な構文構造

前述したように、特殊な句読点は「主題の提示」と「主題についての説明」が続く構文に出現する。それではこの構文は、加点者の言語、すなわちベトナム語ではどのような構文に対応するのであろうか。Cao Xuân Hạo chú biên (2001) *Ngữ pháp chức năng tiếng Việt quyển 1* (『ベトナム語機能文法』巻 1)¹³ によれば、「ベトナム語の基本的な構文は命題の構造に相当し、命題の「主体」(subjectum)と「述語」(praedicatum)は(ベトナム語の構文では)「主題」と「説明」に当たる」(22 頁)、「主題と説明を判断(区別)する手段は、「thì」「là」「mà」である」(25 頁)とされる。これによれば、ベトナム語の基本的な構文は「「題-説」構文」と呼ぶことができる(以

下、この概念を用いる)。

一方、Viện Ngôn ngữ học (2003) *Từ điển Tiếng Việt* (『ベトナム語辞典』)¹⁴によれば、「thì」「là」「mà」は、文法的に以下のように説明される。

○「là」(pp.533)

(1)特別な動詞。物事とその物事の他面からの提示の関係を表わす。又はその特徴についての説明を示す。(2)接続詞(思考・発言・認識の動詞の後にくる)。①述べられたことの内容を表わす。後ろに述べることは述べたことの内容。②必須な因果関係。(3)助詞。①肯定的強意を表わす。②(口語)ある言葉の二重形態の組み合わせ、状態・程度を肯定する。(本稿では(1)の用法に注目する。)

(1) Hà Nội / là / thủ đô nước Việt Nam. (ハノイ / は / ベトナム国の首都 / である。)
1 2 3 1 2 3 2

○「mà」(pp.604)

(1)接続詞。①逆接。②順接。③目的。④因果。⑤仮説。⑥述べられたことについての説明。⑦関係代名詞。(2)文末助辞。(これによれば「題-説」構文は、①逆接、②順接、⑦関係代名詞の用法が該当する。ただし、⑦関係代名詞の用法は、ある名詞とそれを説明する、または修飾する語句を連結する、つまり被修飾語が修飾語の前に置かれる関係であるため漢文の構文とは逆になる。順接・逆接を表わす用法は漢文では「而」に相当する。本稿では(1)①と②の用法に注目し、⑦も合わせて例示する。)

① Tốt / mà / rẻ. (よく / て / 安い)
1 2 3 1 2 3

② Nói / mà / không làm. (言った / のに / やらない)
1 2 3 1 2 3

⑦ Người / mà / anh giới thiệu. (あなたが紹介した / 人)
1 2 3 3 2 1

○「thì」(pp.936 ~ 937)

(1)接続詞。①仮説の結果。②2つの物事の対照。③2つの出来事の連続。④述べられたことについての説明。(2)次に述べることに対する強意を表わす助辞。(これによれば、「題-説」構文では(1)の用法が当てはまる。本稿では(1)の用法に注目する。)

① (Nếu /) mưa / thì / ở nhà. ((もし /) 雨が降っ / たら / 家にいる)
1 2 3 4 1 2 3 4

② (Nếu /) nó đại / thì / em nó lại rất khôn. ((もし /) 彼がバカだっ / たら / 弟さんは頭がいい)
1 2 3 4 1 2 3 4

③ Vừa về đến nhà / thì / trời đổ mưa. (家につい / たら / 雨が降り出した)
1 2 3 1 2 3

④ Công việc / thì / nhiều. (仕事 / は / 多くある)
1 2 3 1 2 3

6. ベトナムの漢文文献・漢喃文献における「là」「mà」「thì」

前節でベトナム語の基本的な構文（「題—説」構文）には「là」「mà」「thì」が使われることを確認したが、それではこれらはベトナムの漢文文献・漢喃文献では実際にどのように使われているのであろうか。漢越語彙集『日用常談』（范廷琥(1768-1832)撰、編纂年代不明、現存版本は嗣徳4年(1851)）は、2480項目の漢語見出語を「天文」「地理」以下「水族」「蟲類」に至る32門に分け、字喃によって説明する。このうち、9割の項目が「[漢語見出語] + 「羅」+ 字喃による説明」形式である¹⁵。この形式は前述の『ベトナム語辞典』では(1)の特別な動詞に当たり、日本語に置き換えるならば「[漢語見出語] は～である」に相当する¹⁶。第一項目は「天 羅 歪 Thiên là trời（天はそらである）」、第二項目は「霄 羅 膠 歪 Tiêu là da trời（霄は紺青である）」のようになる（図9参照）。

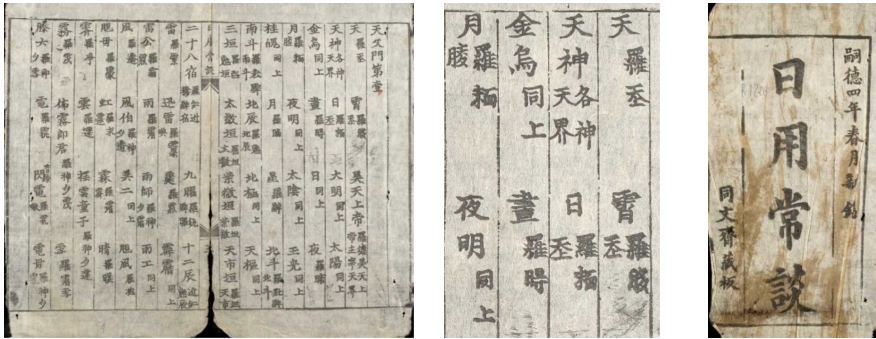


図9：R.1726 日用常談、内扉（右）・冒頭天文門第壹3a（左）・同拡大（中）

一方、「mà」「thì(thời)」は18世紀に編纂された漢字学習の教科書『三千字』（本稿ではR.1667 三千字解譯國語（柳文堂維新乙卯年(1915)刊本）を用いる）に見え（図10参照）、漢字一字ごとに意味を表す字喃が付き、同時に漢越音（ベトナム漢字音）と字喃の読みがチュクオック・グー（字国語）で記される（「羅」を意味する漢字は『三千字』の見出字にはない）。見出漢字「而」「則」の意味は字喃では「麻」「時」で表し、それぞれ漢越音で「而 nhi」「麻 mà」、「則 tác」「時 thời」（thời は嗣徳帝の諱「福時 Phúc Thi」の避諱音）¹⁷と読まれる。日本語に当てはめるならば見出漢字「而」に「ジ、しこうして、しかるに」、「則」に「ソク、すなわち、～ときには」と注記するのに類する。



図10：R.1667 三千字解譯國語

このような漢字と字喃との関係が具体的な典籍に現れるものとして、論語の字喃注釈書『論語約解』がある。本書は、撰者不詳・黎貴惇(1726-1784)校訂の『四書約解』の一部で、郁文堂明命 20 年(1839)刊本が漢喃研究院に所蔵されている(AB.270/3)。漢喃研究院蔵本の『論語約解』は残本で衛霊公以降堯曰途中までを存し、句読点、破音、朱引(固有名詞表示、読書符)が全巻に詳細に加点される資料であるが、特殊な句読点の加点は無い。本文構成は、[論語経文 [(割注) 字喃文○音注+漢文注釈]] になっている。漢文注釈は大全を引用することもあるが、そうでないこともある。

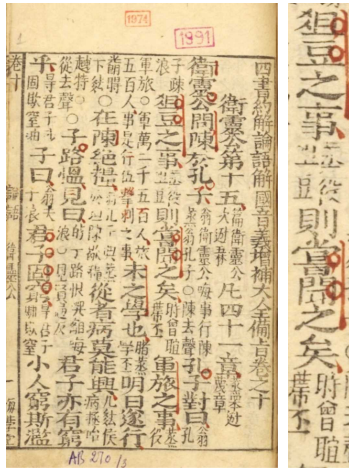


図 11: 『論語約解』 卷 10 衛霊公 1a

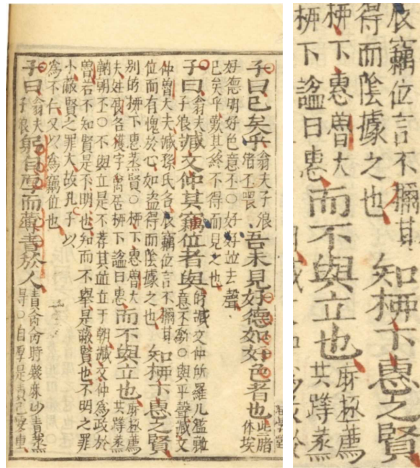


図 12: 『論語約解』 卷 10 衛霊公 4b

図 11 は衛霊公第 1 章冒頭部分で、経文の「俎豆之事」と「則嘗聞之矣」の関係は、字喃文では「時曾瑄蒞丕」のように「時 thi」で示され、これは前節で取り上げた『ベトナム語辞典』「thi」(1)④の用法「述べられたことについての説明」に当たる。

1 2 3 4 5 1 2 3 4 5
則嘗聞之矣 → 時曾瑄蒞丕 (thi tưng nghe đậy vậy)
則ち嘗てこれを聞けり → すなわち / かつて / 聞いた / それ (を) / !

また図 12 は衛霊公第 14 章の後半部分で、経文の「知柳下惠之賢」と「而不與立也」の関係は、字喃文では「麻拯薦共躄蒸醜朝丕」のように「麻 mà」で示され、これは同じく『ベトナム語辞典』「mà」(1)①の用法「逆接」(あるいは②「順接」)に当たる。

1 2 3 4 5 1 2 4a 3 4 4b 5
而不與立也 → 麻拯薦共躄/蒸醜朝/丕 (mà chẳng tiến cùng đứng chung trong triều vậy)
(知り) てともに立たず → (しかし / ない / すすめる / とともに / たつ / に中朝廷 / !)

この経文と字喃文との関係は徹底していて、衛霊公の範囲の調査ではあるが、経文で「而」が使われる 13 箇所は、字喃文ではすべて「麻 mà」が使われ¹⁸、経文で「則」が使われる 7 箇所は、字喃文ではすべて「時 thi」が使われている¹⁹。

以上をまとめると、漢文の訓詁的注釈構文に対する字喃文では「羅 là」(～は～である)、接

続構文の順接・逆接を注釈する字喃文では「麻 mà」（そうして、ところが）、接続構文の条件句を注釈する字喃文では「時 thi」（すなわち、～ときには）が使われていることが分かる。

7. 特殊な句読点はどうのように読まれたのか

以上の分析をもとに、ベトナム加点資料に見られる特殊な句読点について改めて考えてみる。

3 節で例示した詩経大全の 3 種類の左ゴマ点、中央ゴマ点、右ゴマ点は、いずれも訓詁的注釈部分の中で使われ、注解される経文対象語を「題」として、それに続く注解を「説」として理解し（「題-説」構文）、その関係を学習者（加点者）が特殊なゴマ点を加点することで明示していると考えることができた。繰り返しになるが、通常の句読点にはこのような用法はない。この特殊なゴマ点は『日用常談』で見出語の下に書き込まれた「羅 là」と同じ機能を示していることになる。とするならば、これらはただの息継ぎ（pause）ではなく、具体的にベトナム語の読みとして「羅 là」と発音された可能性が考えられる（日本語の訓読で「AはBなり」と読むのと同様である）。

また 4 節で例示した論語節要の文中に現れるレ点も、訓詁的注釈部分の中で注解される経文対象語の左下に加点されたもの（「學*之爲言效也」「習*鳥數飛也」）は、特殊なゴマ点と同様にベトナム語の読みとして「羅 là」と発音された可能性が考えられる。これに対して、同じレ点でも訓詁的注釈構文ではない経文の中で使われているレ点（「子曰學*而時習之」）は、「而」を夾んだ接続構文（この例では順接）であることを明示する加点と見るならば、ベトナム語の読みとして「麻 mà」と発音された可能性が考えられる。

この場合、同じ形態のレ点が訓詁的注釈部分では「羅 là」と読まれ、「而」を夾んだ接続構文では「麻 mà」と読まれ、さらに後述するように条件句を作る接続構文では「時 thi」と読まれたと推測することは、ひとつの符号（レ点）の読みとして、恣意的であって安定性を欠いているのではないとも考えられる。しかし、日本のヲコト点のように加点システムとして発達を遂げた符号においても、同一形態・同一位置で複数の読みや幾能を持つものは存在するし（例えば古紀伝点の下辺中央の星点が「す」と「人名」を表わし、古文尚書平安中期点（甲種朱点）左辺中央の星点が「と」「こと」「とき」を表わすなど）、また加点位置が揺れ動くことも実際の加点資料の中では経験するところである。ベトナムの加点に使われる符号は、科段、句読点、破音、朱引だけであって、日本のヲコト点に比べてシンプルな印象を受けるのは、加点システムとして未発達だったからなのではなく、孤立語で記された漢文を孤立語のベトナム語で読むには、それで十分だったからではないのかと考えられるのである。同じ形態と位置を取るレ点に複数の幾能を持たせたとしても、漢文本文を視認している以上、訓詁的注釈構文を示すのか、それとも接続構文を示すのかに、大きな混乱が起こることはなかったはずである。むしろ通常の句読点や朱引、傍点・傍線が多数加点される漢文本文の紙面の中では、レ点のような形態と左下という位置はより明示的であり、そのような符号にいくつかの機能や読みを持たせることは合理的であったとさえ思われるのである。

このようなレ点の機能を確認するために、R.179 論語節要の学而篇冒頭から類例を追加する²⁰。

(A) 有子曰其爲人也孝弟*而好犯上*者*鮮矣。不好犯上*而好作亂者*未之有也。

（学而篇 2 章冒頭 8a、句読点は「。」で、レ点は「*」で原本通りの位置に示す、以下同じ）

「而」の直前のレ点は、接続構文（逆接）であることを明示する加点、「者」の直後のレ点は接続構文「孝弟而好犯上」「不好犯上而好作亂」で述べられたことについて、さらに説明を明示する加点と見るならば、それぞれ「而」=「麻 mà」（『ベトナム語辞典』の「mà」(1)①逆接または②順接を表わす接続詞）、「者」=「時 thī」（同「thī」(1)④述べられたことについての説明を表わす接続詞）に当たると考えられる。ただし、「者」は「人」と解釈することも可能で、実際に古注では²¹何晏集解は「言孝悌之人必有恭順。好欲犯其上者少也」（言フココロハ孝弟ノ人ハ必ズ恭順有り。好ンデ其ノ上ヲ犯サマク欲スル者ノハ少ナシ）、皇侃義疏は「若有欲犯其君親之顔諫争者。有此人少也。」（若シ其ノ君臣ノ顔ヲ犯シ諫争セント欲スル者ノ有ラバ、此ノ人有ルコト少ナシ。）と解釈している（後半の「作亂者」には具体的な注釈が対応しない）。一方、新注は論語節要の割注に「孝弟順徳也故無犯上作乱之事」（孝弟ハ順徳ナリ。故ニ上ヲ犯シテ乱ヲ作ス事無シ。）とあるが、論語集註大全（R.1023）には同文は見えず、「此言人能孝弟。則其心和順。少好犯上。必不好作亂也」（此レ言フココロハ人能ク孝弟ナレバ、則チ其ノ心和順ニシテ、上ヲ犯スコト好ムコト少ナシ。必ズ乱ヲ作スコト好マズ。）（10a 集註）、「叔子曰。孝弟順徳也。順徳二字。足以盡孝弟之義。而不好犯上作乱之意已具乎其中矣。」（叔子ガ曰ク、孝弟ハ順徳ナリ。順徳ノ二字ハ、以テ孝弟ノ義ヲ尽クスニ足り、而シテ上ヲ犯シ乱ヲ作スコトヲ好マザル意、已ニ其ノ中ニ具ル。）（13a 大全）、「程子曰。孝弟順徳也。故不好犯上。豈復有逆理亂常之事。」（程子ガ曰ク、孝弟ハ順徳ナリ。故ニ上ヲ犯スコト好マズ。豈ニ復タ理ニ逆ラヒ常ヲ乱ス事有リヤ。）（12a 集註）とあり、これらを摘録したものかと思われる。いずれにしても、古注のように「者」を「人」と解釈することができない。経文の「者」は、直前の「孝弟而好犯上」「不好犯上而好作亂」を受けて、これらに続く「鮮矣」「未之有也」を結びつけている用法と考えることができ、ここに加点されたレ点は「thī」に当たると考えられる²²。

(B)曾子曰。吾日三省吾身。爲人謀*而不忠乎。與朋友交*而不信乎。傳*不習乎。（学而篇 4章 9a）

「而」の直前のレ点は、いずれも(A)の例と同様に接続構文（逆接）であることを明示する加点と見るならば、「而」=「麻 mà」に当たると考えてよい。これに対して「傳*不習乎」の部分はやや複雑で、一見すると「傳」と「不習」の関係が「羅 là」で解釈されているように思われるが、古注も新注もそのようには解釈していない。古注では何晏集解が「言凡所傳之事。得無素不講習而傳乎」（言フココロハ凡ソ伝フル所ノ事、素ヨリ講ヘ習ハズトイフコト無クシテ伝フルコト得ムヤ）、皇侃義疏が経文「傳不習乎」について「凡有所傳述。皆必先習。後乃可傳。豈可不經先習。而妄傳之乎。」（凡ソ伝述スル所有レバ、皆必ズ先ヅ習ヒ、後ニ乃チ伝フベシ、豈ニ先習ヲ經ズシテ、妄リニ伝フベケムヤ。）、「集解について「言所傳之事。無得本不經講習而傳之也。」（言フココロハ所伝ノ事、本ヨリ講習ヲ經ズシテ伝フルコト得ルコト無シ。）、「邢昺注疏も「凡所傳授之事。得無素不講習而妄傳乎。」（凡ソ伝授スル所ノ事、素ヨリ講習セズシテ妄リニ伝フルコト無キコトヲ得ムヤ。）と解釈する。これらにしたがうならば「傳」はその在り方（内容）を問題とし、「不習」を目的語とする動詞として機能していることになる。これに対して論語集註大全（R.1023）では、「傳謂受之於師。習謂熟之於己」（伝トハ師ニ受クルヲ謂ヒ、習トハ己ニ熟スルヲ謂フ。）（17b 集註）、「問曾子三省。無非忠信學習之事。」（問フ曾子三省、忠信學習ノ事ニ非ズトイフコト無シ。）（17b 大全）、「朱子曰。謀不忠則欺於人。言不信則欺於友。傳不習則欺於師。」（朱子ガ曰ク、謀リテ忠ナラ

ザレバ則チ人ヲ欺ク。言信アラザレバ則チ友ヲ欺ク。伝ヘテ習ハザレバ則チ師ヲ欺ク。) (18a 大全) と解釈する。大全 (18a) の「傳不習則欺於師」も古注の解釈と同様に、「傳」は「不習」を目的語とする動詞と考えることもできるが、経文「爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎」の「謀」「信」「傳」に対する大全の解釈「謀不忠則欺於人。言不信則欺於友。傳不習則欺於師」は同じ構文であり、経文の「謀而不忠」「交而不信」を大全が「謀不忠」「言不信」と解釈している以上、経文の「傳不習」は大全では「傳而不習」と解釈していたことになる（ただし、この部分は節要には引用されない）。とするならば、「傳」の直後に加点されたレ点は、「mà」（『ベトナム語辞典』の「mà」(1)①逆接または②順接）に当たると考えられる。

(C)子曰。巧言令色*鮮矣仁。(学而篇3章8b)

「巧言令色」「鮮矣仁」の関係は古注も新注も同様で、「巧言令色」であるときは「鮮矣仁」であると解釈する。すなわち、何晏集解では「苞氏曰。巧言。好其言語。令色。善其顔色。皆欲令人説之。少能有仁也」(苞氏曰。言ヲ巧ニストハ、其ノ言語ヲ好クスルゾ。色ヲ令クストハ、其ノ顔色ヲ善クスルゾ。皆人ヲシテ説バシメマク欲ス。能ク仁有ルコト少ナシ。)、皇侃義疏では経文に対して「巧言者便僻其言語也。令色者柔善其顔色也。鮮少也。此人本無善言美色。而虚假爲之。則少有仁者也。」(巧言トハ其ノ言語ヲ便僻スルゾ。令色トハ其ノ顔色ヲ柔善スルゾ。鮮ハ少ナリ。此ノ人本ヨリ善言美色無シ。而ルヲ虚假ニ爲ストキハ、則チ仁有ルコト少ナシ。)、邢昺注疏では経文に対して「此章論仁者必直言正色。其若巧好其言語。令善其顔色。欲令人説愛之者。少能有仁也。」(此ノ章ハ仁者ハ必ず言ヲ直シ色ヲ正スコトヲ論ズ。其レ若シ巧ミニ其ノ言語ヲ好クシ、其ノ顔色ヲ善クセシメ、人ヲシテ説愛セシメント欲セバ(欲スルトキハ)、能ク仁有ルコト少ナシ。)と解釈し、論語集註大全(R.1023)では「巧好。令善也。好其言。善其色。致飾於外。務以悅人。則人欲肆。而本心之徳亡矣。」(巧ハ好、令ハ善ナリ。其ノ言ヲ好クシ、其ノ色ヲ善クシ、飾リヲ外ニ致シテ、務メテ以テ人ヲ悦バシムルトキハ、則チ人欲肆イママニシテ、本心ノ徳亡ナフ。)(15a 集註)と解釈する(節要には「致飾於外」以下が引用される)。特に皇侃義疏、新注において、この関係が「則」で繋がれていることは、ここに加点されたレ点は「thi」（『ベトナム語辞典』の「thi」(1)①仮説の結果を表わす接続詞）に当たると考えられる。

ベトナムには日本のヲコト点図に当たるものや(小助川貞次 2014・2017・2019 に示された加点一覧を除く)、漢文読法そのものについて記述した文献(例えば太宰春台『倭読要領』のような文献)が存在するのか、現在までのところ確認できていない。また漢文文献を読む際に、本稿で取り上げてきたような「加点」を伴いながら読む習慣も現在では失われてしまっている。したがって、本稿で主張する句読点の具体的な「読み」の可能性は、ベトナム漢文読解におけるひとつの仮説の域に留まるものであるが、これを証明する手掛かりがまったく無いわけではない。例えば、ヲコト点図や漢文読法について記述した文献の検索(破音については范廷琥『群書参考』(明命壬申年(1832)撰)が知られている)、かつて漢文文献を実際に読んでいた世代(ベトナムにおける最後の科挙は1919年である)の子孫への聞き取り調査(祖父や曾祖父達ほどのように漢文を読んでいたのか)、あるいは現在でも漢文文献を専門的に学んでいる学生への意識調査(白文に句読点を打たせ、その際の意識を聞き取る)などが挙げられる。今後の重要な課題である。

8. まとめ

本稿では、ベトナム国家図書館所蔵（喃遺産保存財団公開）の経書加点資料と漢喃研究院所蔵の『論語約解』を取り上げ、通常の句読点とは異なる形態・位置を取る特殊な句読点に注目し、これらが訓詁的注釈構文、助字を伴う接続構文、助字を伴わない接続構文に多く現れ、ベトナム語の基本的構文構造でいうところの「題-説」構文の指標、すなわち「là」「mà」「thì」で読まれたのではないかとすることを推定した。これまで、ベトナムの漢喃資料に加点があることについては知られていたが、具体的にどのように読まれた結果を反映するものであるのかという点については解明できずにいた。本稿での推定は一つの仮説ではあるが、ベトナム語にも漢文本文に自言語を符号によって直接加点する方法が存在した可能性を示すものである。

さらに重要なことは、ベトナム語によるこのような「読み」が、訓詁的注釈構文、助字を伴う接続構文、助字を伴わない接続構文などの特定箇所集中し、それ以外の漢文本文が漢越音（ベトナム漢字音）で字音読されていたとするならば、漢文の語順通りに朝鮮漢字音で読みながら句節の切れ目に朝鮮語の文法要素を加えていく韓国の音読口訣の読法に近いことになる²³。このような読解方法は、漢文本文の句節を視認しながら構文の重要な部分にのみ自言語を表わす符号を加点していくという点で、極めて効率的な読解方法であると言える。日本語の訓読方法は、自言語（日本語）を漢文本文全体に満遍なく覆い被せていく複雑な読法であり、漢字文化圏諸言語の中ではむしろ特殊な読法であることも見えてくる。

9. 今後の課題と研究展望

冒頭で述べたように、ベトナムの加点資料の加点内容には、科段、句読点、破音、朱引があり、それぞれがベトナム語による読解とどのように関わっているのか、本稿では特殊な句読点に注目して一つの仮説を提示したが、句読点以外の加点については取り上げることはできなかった。この点については、「論語加点資料から見た日本語とベトナム語による漢文読解の研究」(2020年度富山大学大学院人文科学研究科修士論文、2021年1月)において、ベトナムの加点資料（漢喃研究院蔵『論語約解』）と日本の訓点資料（東洋文庫蔵正和本『論語集解』）を比較しながら、本文構成理解（科段・通常の句読点）、語彙理解（破音・声点、朱引）、自言語を表す要素（日本語の訓点・ベトナム語の字喃）の観点から解明を試みた。この成果についてはいずれ公表する予定であるが、本稿で論じた内容も含めてなおいくつかの課題が残されている。

第一点は、ベトナムの加点資料はどの資料でも共通した加点方法と内容を持つのかという点である。日本の訓点資料では、訓読・加点の方法と内容は漢籍を所管する博士家と仏典を所管する仏家寺院とに別れ、同じ博士家でも諸家（大江、菅原、藤原、中原、清原）によって、また仏家でも宗派・法流によって訓法が異なることが知られている。ベトナムの加点資料には、ベトナム語を直接表す要素がほとんど表れないが、科段、句読点、破音、朱引といった加点方法は、学習者・読解者個人のものなのか、それとも個人を超えて社会集団によってある程度共通するものなのか。この課題はきわめて興味深いものであるが、ここで社会集団と言った場合、その集団が所管する典籍の内容、例えば同じ漢籍でも経部なのか史部なのか、同じ論語でも論語大全のような純粋な漢籍なのか、論語約解のように論語本体を節略してベトナム語の字喃を加えた漢喃文献なのか、そのような典籍の内容を含めた社会集団を考えておく必要があるだろう。ベトナム国内には、漢喃研究院、ハノイ国家大学人文社会科学大学歴史学部図書室、ハノイ社会科学院図書室、

ホーチミン国家大学人文社会科学大学言語学研究室などに多数の漢文文献・漢喃文献が所蔵されているし、寺院経蔵にも多数の漢籍・仏典が所蔵されている。しかも現在刊行されている目録類には未収録のものが多く、ベトナム国内だけでも現存する漢喃資料を網羅的に把握すること自体が大きな課題になる。

第二点は、ベトナムの加点資料に見える科段、句読点、破音、朱引は、小助川(2009)が主張する「訓点の類似性と訓読加点のプロセス」によれば、「個別言語・自言語を超越する符号（レベルA）」であって「外国語としての基礎的共通的な学習段階」に属することになる。ところが、本稿で明らかにしたように、句読点の一部にはベトナム語の読みを示すものが含まれている可能性があり、また通常の句読点にも日本語とベトナム語の語順構造に基づく違いも見られる。さらに朱引に注目すれば、同じ文献（論語）の同じ固有名詞であっても、日本語とベトナム語の間には違いも見られる（以上の詳細は修士論文で明らかにした）。とするならば、小助川(2009)が主張する訓点の類似性やレベル設定は、大筋においては認められるものの、ある部分においては修正される必要性が出て来る。漢字文化圏諸地域・諸言語の全体を視野に入れて漢文読解を考えていく上できわめて重要な問題となる。

第三点は、日本の漢文訓読によって生じた語法は、その後の日本語の文体に大きな影響を及ぼしたが、例えば論語約解にあるようなベトナムの字喃文は、ベトナムの研究者には「翻訳」として理解されているが、原漢文に基づく読解解釈言語であって自然なベトナム語でも翻訳でもない。「翻訳」の定義にも関わることであるが、ベトナムの加点資料や漢喃文献に見える字喃は、ベトナム語文体史の中でどのように位置付けられるのか。日本語の抄物資料や朝鮮語の諺解資料の文体とも比較しながら考察する必要がある。

これらの課題は決して短時間で解決できるものではなく、典籍史や制度史、漢文訓読史についての一層の理解が必要であり、今後も弛まぬ努力をしていこうと考えている。さらに視野を広げるならば、小助川(2012)(2018)によって指摘されているように、漢字文化圏以外の他の言語文化圏、例えば欧州ラテン語文化圏における中世ラテン語注釈文献の研究にも目を向け、国際的な研究活動の中でベトナムの漢文訓読、漢字文化圏の漢文訓読を展開することにもチャレンジしたい。

注

- 1) 字喃の書込がまったく無いわけではない。後述するように『三千字』などの対訳資料では漢字見出語に字喃が添えられることはあるが、日本語訓点資料の仮名点のような使用例は確認できていない。なお、漢文本文にチュ・クオック・グー（字国語）が書込まれる例も指摘できるが（小助川貞次 2014）、基本的には漢越音（ベトナム漢字音）を表記したものである。
- 2) オワイン(2006)(2014)、岩月純一(2008)、小助川貞次(2014)(2017)(2019)、Kosukegawa and Whitman (2018) など。
- 3) 小助川貞次(2019)には、この特殊な形態の加点が「主題の提示」と「主題についての説明文」が続く構文の境目に多く用いられており、単なる句読点とは異なる一種の「繫辞」の機能を示していると考えられることができる。（発表資料 5 頁）という指摘があるが、漢文本文が具体的にどのように読まれたのかという考察はなされていない。

- 4) R.937 ~ 945 易経大全 9 冊は清朝康熙 54 年(1715)の序文を持つが後印本と見られ、各冊第 1 丁表右下に青ペンで「段應溪先生点跡本」の書込がある。
- 5) 漢喃研究院所蔵『論語約解』(四書約解 AB.270/1-5 の内 270/3)。本稿での画像使用について漢喃研究院の許諾を得た。
- 6) 注 2 小助川貞次及び Kosukegawa and Whitman 文献。
- 7) 小助川貞次(2011)では、韓国の点吐口訣資料(華嚴経系)や日本の平安時代初期の仏書訓点資料に左下句切点のあることが指摘されているが、本稿で論じる「特殊な句読点」との繋がりはない。
- 8) 「時」を「寺」で表記するのは阮朝嗣徳帝(在位 1847-1883)の諱「福時 Phúc Thi」の漢字表記上の避諱である。また「時」の漢越音 Thi も避諱され、近似音の Thòi が使われるようになった。
- 9) ただし、一部の資料で通常のゴマ点を用いた句読点が中央もしくは左下に加点されるケースがある。この現象は、料紙右半面の右端一行目に限られる。これはベトナムの漢文資料のほとんどが冊子体袋綴の形で作られているために、料紙右半面の右端一行目附近(「のど」部分)は糸綴に近く書込みが困難になるからである。R.1310 詩経大全巻 5 の 28 丁右半面一行目(左下に句読点)、同 63 丁右半面一行目(中央に句読点)などを参照されたい。
- 10) 小助川貞次(2006)(2009)に述べられている加点段階の考え方が参考になる。
- 11) 小助川貞次(2017)は「範囲指定点」(413 頁図 1)とするが、小助川貞次(2019)2 頁では科段として図示されている。
- 12) これらの 4 資料は裴輝碧摘編『四書節要』で、劉春銀(他)編『越南漢喃文献目録提要』(台湾・中央研究院中国文哲研究所、2002 年)によれば、柳文堂成泰 7 年(1895)刊本が 3 種知られる(漢喃研究院 AC.226/1-4、Paris MG FC 63707、Paris MG FC 61511)。第 1 冊大学・中庸、第 2 冊論語、第 3-4 冊孟子。ベトナム国家図書館には、R.380 大学節要(中庸なし)、R.178 論語節要(巻第 2 述而~子路)、R.179 論語節要(巻第 1 序~雍也)、R.180 孟子節要(巻 1-2)が所蔵される。R.380 大学節要巻頭目録によれば、大学 1 巻、論語 3 巻、孟子 3 巻、中庸 1 巻からなるので、中庸、論語巻 3(憲問~堯曰)、孟子巻 3(告子上から尽心下)を欠いていることになる。なお R.380 大学節要は文中のレ点(57b)しかなく、また文末のレ点も無い。この資料は全体の加点が特定の丁に偏る。なお 8ab にもレ点の加点が見えるが、通常の句読点の変形と見なす。
- 13) Cao Xuân Hạo (chủ biên), *Ngữ pháp chức năng tiếng Việt* quyển 1, Nxb Giáo dục, 2001 (カオ・スアン・ハオ(主編)『ベトナム語機能文法』巻 1、教育出版社、2001)。引用する原文は以下の通り。
Cấu trúc cú pháp cơ bản của câu tiếng Việt tương ứng với cấu trúc của mệnh đề. Nó gồm hai phần: Đề và Thuyết, ứng với sở đề và sở thuyết của mệnh đề (pp.22); các phương tiện đánh dấu sự phân chia Đề - Thuyết trong câu và trong các tiểu cú là thì, là và mà. (pp.25)
- 14) Viện ngôn ngữ học, *Từ điển tiếng Việt*, Nxb Đà Nẵng, 2003 (言語学研究院『ベトナム語辞典』、ダナン出版社、2003)。引用する原文は以下の通り。
[Là4] (pp.533) I Động từ đặc biệt, biểu thị quan hệ giữa phần nêu sự vật, sự việc với phần nêu chính bản thân nó nhìn ở một khía cạnh khác, hay nêu đặc trưng của nó, hoặc nội dung nhận thức hay giải thích về nó. II Kết từ. 1 (dùng sau một số động từ cảm nghĩ, nhận thức, nói năng). Từ biểu thị điều sắp nêu ra là nội dung của điều vừa nói đến. 2 (có thể phối hợp với “hễ”). Từ biểu thị điều sắp nêu ra là tất yếu xảy ra mỗi khi có điều vừa nói đến. III Trợ từ. 1 Biểu thị ý nhấn mạnh sắc thái khẳng định. 2 (khẩu ngữ). Từ dùng để làm cho lời nói có sắc thái tự nhiên hoặc có sắc thái nhận định chủ quan của người nói. 3 (khẩu ngữ). Từ dùng tổ hợp với hình thức lặp của một từ khác để biểu thị ý nhấn mạnh sắc thái khẳng định về một mức độ, một trạng thái tác

động đến người nói.

[Mã2] (pp.604) I Kết từ (đứng trước động từ, tính từ hoặc cấu trúc chủ ngữ - vị ngữ). 1 Từ biểu thị điều sắp nêu ra là không phù hợp với điều vừa nói đến, có gì trái với lẽ thường. 2 Từ biểu thị điều sắp nêu ra là mặt khác, đối chiếu bổ sung cho điều vừa nói đến. 3 Từ biểu thị điều sắp nêu ra là mục đích của việc vừa nói đến. 4 Từ biểu thị điều sắp nêu ra là kết quả, hậu quả của điều vừa nói đến. 5/ (thường dùng phối hợp với *thì* ở về sau của câu). Từ biểu thị điều sắp nêu ra là giả thiết, nêu lên để từ đó rút ra một kết luận, một nhận định. 6 Từ biểu thị điều sắp nêu ra là nội dung thuyết minh cho ý vừa nói đến. 7 (dùng sau danh từ và trước một cấu trúc chủ ngữ - vị ngữ). Từ biểu thị điều sắp nêu ra thuyết minh đối tượng, sự vật, sự việc vừa nói đến.

[Thi2] (pp.936-937) I Kết từ. 1 (thường dùng kết hợp với *nếu, hễ, giá, mà* ở về trước của câu). Từ biểu thị điều sắp nêu ra là điều sẽ, có thể hoặc tất yếu xảy ra với giả thiết hay điều kiện đã nói đến. 2 Từ dùng phối hợp với *nếu* ở về trước của câu để biểu thị quan hệ tương ứng giữa hai sự việc có thật, có việc này thì mặt khác cũng có việc kia. 3 (thường dùng phối hợp với *vừa* ở về trước của câu), từ biểu thị quan hệ tiếp nối giữa hai sự việc, sự việc này xảy ra xong là tiếp ngay đến sự việc kia. 4 Từ biểu thị điều sắp nói có tính chất thuyết minh cho điều vừa nêu ra. 5 (khẩu ngữ). Từ biểu thị ý phủ định - mỉa mai đối với điều sắp nêu ra ở người đối thoại, dưới hình thức tựa như thừa nhận điều đó, đem so sánh với điều ngược lại mà người đối thoại vừa nhận định ở 1 người khác, nhằm tỏ ý không đồng tình với người đối thoại. II Trạng từ (khẩu ngữ). Từ biểu thị ý nhấn mạnh về điều sắp nêu ra.

- 15) 項目数は Trần Trọng Dương (2016)による。「羅」を伴う項目は 2195 項目 (全体の 88%) あり、さらに「同上」 (= 羅) とするものが 241 項目あり (いずれも稿者の計数)、これらを合わせると 98%が「羅」を伴う項目になる。
- 16) 字喃「羅」の読みが「là」であることは、この語彙集の項目形式および諸辞書に「羅 là」の記載があることによって明らかである。例えば竹内与之助『字喃字典』(大学書林、1988 年) 262 頁、Nguyễn Quang Hồng, *Tự điển chữ Nôm dẫn giải* tập 1 (『字喃引解字典』巻 1), Nxb Khoa học xã hội (社会科学出版社), 2014, pp.906 など。
- 17) 注 8 参照。
- 18) 以下の 13 例 (例文の後の数字は章数と丁数表 a 裏 b)。賜也女以予為多學而識之者與(3_1b)、無為而治者其舜也與(5_1b)、恭己正南面而已矣(5_1b)、邦無道則可卷而懷之(6_3a)、可與言而不與之言(7_3a)、不可與言而與之言(7_3a)、而不與立也(13_4b)、躬自厚而薄責於人(14_4b)、君子疾沒世而名不稱焉(19_5b)、君子矜而不爭(21_6a)、群而不黨(21_6a)、有一言而可以終身行之者乎(23_6b)、斯民也三代之所以直道而行也(24_6b)。なお恭己正南面而已矣(5_1b)は字喃文で「麻渚丕」とあり、『ベトナム語辞典』「mà」の(7)文末助辞の用法に当たる。
- 19) 以下の 7 例。則嘗聞之矣(1_1a)、立則見其參於前也(5_2a)、在輿則見其倚於衡也(5_2a)、邦有道則仕(6_2b)、邦無道則可卷而懷之(6_3a)、樂則韶舞(10_4a)、則遠怨矣(14_5a)。
- 20) 論語で字喃文を含む論語約解 (漢喃研究院蔵本) は衛靈公以降堯日までしか現存せず (特殊な句読点の加点は無い)、一方の論語節要は述而～子路 (R.178)、学而～雍也 (R.179) しか現存しない。論語節要に見える特殊な句読点か論語約解の字喃文ではどのように記述されていたのか確認できないが、6 節で述べたように、経文「而」と字喃文「麻 mà」、経文「則」と字喃文「時 thi」の規則的対応からするならば、論語節要に加点されたレ点部分が論語約解では「麻」「時」で解釈されていることは容易に推測できる。
- 21) 古注、新注の引用と句読は、東洋文庫蔵論語集解正和四年(1315)書写正慶二年(1333)校点本 (『東洋

文庫善本叢書』11、勉誠出版、2015年）、論語義疏（懷徳堂記念会、1923年）、論語注疏（十三經注疏整理本、北京大学出版社、2000年）、論語集註大全（ベトナム国家図書館、R.1023）による。訓読文を示す場合、何晏集解は東洋文庫蔵正和本の訓点におおむねしたが、他は諸書を参照した稿者の訓読に拠る。

- 22) 太田辰夫(1964)は、この例を「助詞「者」を末尾に有し、全体で1個の名詞に相当する連語を「者」字連語という」（25頁）として上げている（160頁では「名詞性連語」とする）。また牛島徳次(1967)は、「者」は付属詞の中の後置添詞で5つの用法、すなわち(1)「名詞・形容詞・動詞・数詞等の自立詞または述語句について、これらを個体化し、名詞と同じ機能の句を形成するもので、かかる場合の「者」は、「……のもの、……すること」等の意味を表わす」、(2)「固有名詞またはこれに準ずる句について、「……というもの」という意味を表わす」、(3)「述語成分または規定語について「提示」を強調し、「……は」という意味を表わす」、(4)「主語成分の前に位置する詞または句が、「理由」「假定」等を示す場合、そのあとについて、これらの条件の強調を表わす」、(5)「比況」あるいは「疑問」を表わす述語成分のあとについて、それらの語気を強調する」用法をあげる（246-250頁）。本例は牛島徳次の(1)または(3)に当たる。
- 23) 呉美寧(2014)、鄭在永・安大鉉(2018)に朝鮮語における漢文読法の概説と現存資料の紹介、さらに口訣研究史が纏められていて参考になる。

引用文献

- ・岩月純一(2008)：ベトナムの「訓読」と日本の「訓読」—漢文文化圏の多様性—、『「訓読」論』、105-119頁、勉誠出版
- ・牛島徳次(1967)：『漢語文法論（古代篇）』、大修館書店（3版(1977)による）
- ・呉美寧(2014)：韓国の口訣資料および口訣研究の現況について、『日韓漢文訓読研究』、289-332頁、勉誠出版
- ・太田辰夫(1964)：『古典中国語文法』、汲古書院（改訂第一版(1984)による）
- ・グエン・ティ・オワイン(2006)：ベトナムの「漢文訓読」について、『典籍交流（訓読）と漢字情報』、北海道大学
- ・グエン・ティ・オワイン(2014)：（講演記録）ベトナムの漢文訓読について、『訓点語と訓点資料』133、1-14頁
- ・小助川貞次(2006)：訓点資料が出来上がるプロセスについて、『訓点語と訓点資料』117、40-49頁
- ・小助川貞次(2009)：東アジア学術交流史としての漢文訓読、『富山大学人文学部紀要』51、33-44頁
- ・小助川貞次(2011)：句読点の機能から見た東アジア漢文訓読史、『訓点語と訓点資料』127、1-10頁
- ・小助川貞次(2012)：漢文訓読史概説の構想、『富山大学人文学部紀要』56、109-121頁
- ・小助川貞次(2014)：ベトナムの加點資料について、『訓点語と訓点資料』133、82-72頁
- ・小助川貞次(2017)：關於越南國立圖書館所藏書經大全與五經節要的加點、『東亞漢籍與越南漢喃古辭書研究』、361-371頁、中國社會科學出版社
- ・小助川貞次(2018)：漢文訓読研究のコペルニクスの転回、『富山大学人文学部叢書1（人文知のカレイドスコープ）』、130-139頁、桂書房
- ・小助川貞次(2019)：ベトナム阮朝時代に論語はどのように学習されたのか、The Vietnamese Confucian Examination System (1075-1919) and its Legacy, Vietnam Academy of Social Sciences, Hanoi
- ・鄭在永・安大鉉(2018)：漢文読法と口訣、『韓国語教育論講座』第3巻、335-370頁、くろしお出版
- ・Cao Xuan Hao (1992), "Some Preliminaries to the Syntactic Analysis of the Vietnamese Sentence", *Mon* -

Khmer Studies 20, pp.137-151

- Cao Xuân Hạo (chủ biên)(2001), *Ngữ pháp chức năng tiếng Việt*, quyển 1, tái bản lần 4, Nxb Giáo dục, Hà Nội
- Đào Thị Thanh Lan (1994), *Phân tích câu đơn hai thành phần tiếng Việt theo cấu trúc đề thuyết*, luận án phó tiến sĩ khoa học Ngữ văn, Trường Đại học Tổng hợp Hà Nội
- Kosukegawa and Whitman (2018): On the Significance of the Glosses in Vietnamese Classical Chinese Texts, *Journal of Vietnamese Studies*, Vol.13 No.3, pp.29-50, University of California Press
- Nguyễn Văn Huệ (chủ biên)(2003), *Từ điển ngữ pháp tiếng Việt cơ bản*, Nxb Đại học Quốc gia TP Hồ Chí Minh, TP.HCM
- Trần Kim Phượng (2010), “Bàn thêm về cấu trúc đề - thuyết của câu tiếng Việt”, *Ngôn ngữ & đời sống* số 3 (173), pp.1-9
- Trần Trọng Dương (2016), *Khảo cứu từ điển song ngữ Hán Việt “Nhật dụng thường đàm” của Phạm Đình Hồ*, Nxb Văn học, Hà Nội

附記・謝辞

本稿を執筆するにあたり富山大学人文学部の小助川貞次教授の指導を受けた。また漢喃研究院院長 Nguyen Tuan Cuong 准教授ならびに同銘文研究室室長 Tran Trong Duong 博士には、資料利用に関する格別なる御高配と漢喃文献に関する貴重な御教示を得た。記して感謝申し上げます。なお本稿は訓点語学会『訓点語と訓点資料』第 145 輯（令和 2 年 9 月 30 日発行）に掲載されたものに補筆したものである。